

たのもそのころであつた。

精が尽き涙も枯れ果て、苦しさ悲しさも超越すれば、無気力な亡者ともなり、恐怖にもうとくなる。あの状態がいま少し続いたなら、重度の栄養失調で次々に死んだであろう。また人里離れた森林の中だったのが幸か、発疹チフスなどの悪病もなく、なんとか生きのびていた。それが二十一年三月ころから環境が幾らかずつ改善され、生きる最低の食糧も与えられるようになった。

シベリアに春が訪れたころ、林の中の乾燥きのことを探しあさったことも、白樺の若芽を夢中になって手でしごき、口に入れかみしめてうまかったことも、今はっきり残っている思いの一つである。

シベリアに入ってから、三、四か月くらいは野菜などろくに口にしたこともなかったし、入浴はおろか顔も洗わなかった。体の表面が紙でもはぐように取れたのは垢だったのか、死んだ表皮だったのが、入浴に連れていかれたのは暖かくなりだした二十一年の春ころであつた。毛ジラミ予防とのことで、陰毛やわき毛を剃られたのはそのころで、伸び放題の髪やひげはあの生活の中でどの

ように処理したかは思い出せないことである。ただはつきり記憶に残っていることは、体がやせて衰えるほど、シラミは増え、肌着はシラミの卵で養蚕の種紙のようにいっぱいになり、夜寝ていてかゆく、背中などに手をやると、血を吸い丸々と太ったシラミが爪にひっかかってくる。たまりかね起きて、中央にある赤く焼けているストーブの上に肌着を広げると、熱さでシラミがはい出すのを見はからって、強くふると、パチパチとゴマでもいるように音がしたものである。

シベリア収容所生活三か年の

病人と怪我人

栃木県 加藤 源四郎

二十年十二月 同じ中隊の高橋一等兵が夜中に腹痛をうったえ、さわがしくなった。軍医、軍医と誰かが言っていたので、自分も行つて見た。これは胃痙攣だ、俺がなおしてやる。

右足と左腰をおし、右尻をたたき、五分間でうなりをとめ、十五分くらいで平静にもどった。ちょうど二十年一月、満州延吉で同年兵の胃痙攣をなおしてやったのと同じであった。

二十一年一月 中隊の一人が、痔が痛く作業にいけないとのこと。二、三日前、軍医に見てもらったが、設備もなく、手術は出来ないと薬をぬってくれただけ。そこで俺がなおしてやると寝台のうえでなおした。胃痙攣と同じ方法で、明日の朝までになおるから、五分間の治療、翌日は元気で仲間と作業に出ていき、その後二年間異常なし。

二十一年二月 自分達の小隊は草原で家屋の基礎工事の濠を掘っていた。十時頃、五百メートルほど先の別の小隊の兵士が走ってきて、小隊長に言われてきた、貴隊に加藤一等兵がいるでしょう。実はうちの小隊で大きな事故があり、怪我人がでた。直ぐ見てもらいたいと。小隊長は「加藤、行ってやれ」。使人のあとをおった。見ると、一人が足をなげだし、痛い、痛い泣いていた。自分達と同じ一・五メートルの濠を掘っていた。零下二十

五度の気温、三人が土砂崩れに遭い、腹上まで掘り、はいでしたが、鳥居上等兵の左足膝下が内側にはずれてい

る。よし、皆んな手伝ってくれ、あおむけにしろ、そして左右の腕を一人づつおさえろ、右足もおさえろ、自分は左足を持って言った。空気を十分吸い、全部はきだしたところで静かにとめろ。その瞬間、左足を一気に折りまげた。ほんのかすかな音がして、もとどおりにはいっ

た。これで大丈夫だ、あの工具置場にねかしておき、五時までに戸板をつくり、みんなでかついで帰ってくれるようにしたのだ。その晩七時頃、衛生兵がきて、軍医殿が膝のいれかたを教えてください。大したことはない、教えるほどのことはないことわった。聞くところによると、現在大阪で病院を開業（産婦人科）しておられるか。

二十一年三月 自分の小隊はブロック積みをしていった。十時頃、鈴木一等兵が近くの公衆便所にいったが、二十分くらいしても帰らないので、いって見ると、便所の中に青白い顔してうずくまっていた。どうした、痔が

悪く、出血したので気分が悪い、便所の中は真赤だ。よし、俺がなおしてやる、外にでろ。こおった雪のうえで防寒衣を着たまま、うつぶせにして、足腰尻と五分間くらいで治療した。これでなおるから、便所の中でやすめ。そして三十分くらいしたら、気分が良くなったからと出てきた。まあ、今日は仕事をすするな。帰る五時までに元気になり、並んで一緒に収容所に帰った。

二十一年七月 石橋大尉副官が、最近、体の調子が悪く寝込んだ。軍医に見てもらったが、はっきりしない。

ある日、満州延吉で胃痙攣を治したこと、また、終戦直前、八面城で前部隊長をなおしたことを知っていた元内務係田畑曹長がきて、副官を見てくれとのこと。副官のいる小さな舎にはいり、五分間治療、明日もきてくれと言われ、その後週二回、計六回ほどして良くなった。

毎月のカチエゴール身体検査は何時も二級だったが、二十一年、二十二年の十二月から二月までの厳寒月は検査の翌日、加藤はオッカーに変更の週報がきた。多分、これは副官が所長に申し入れたものだ。一、二級は零下二十五度までは毎日野外作業、約八百五十人、三級は収

容所の雪の整理二十人くらい、オッカーは仕事をしない、食べて寝るだけ十人くらいだった。

二十二年六月 他の中隊の話だが、兵士四人が仕事先でとった草を雑炊にいれ、広場で会食した。二十分ほどして四人とも笑いだし、笑いがとまらない。そして部屋に帰り、日本に帰るのだと、身のまわりをまとめた。驚いた仲間はずれて医務室に。しかし軍医も原因はわからない。しかたなく四人とも巻脚絆でからだを寝台にしばらくつけておいた(部屋からでないように)。二日ほどしてなおった。このことを所長に話したら、日本兵は馬鹿だ、ソ連では豚でさえ食べないと笑っていたとか。

二十二年七月 ある中隊の話。兵士が日頃から腕一本くらいなくしても早く日本に帰りたいと。ある日、ミキサの係で、休憩後、ミキサの中のゴミをのぞいていたら、マダムがスイッチをいれた。瞬間、右手首がプロペラで切り落とされ、ワアーと大声を出して、マダムがスイッチを切った。兵士は左手で手首をひろい、台から降りて来た。すぐ布で止血をした。帰ることも出来ず、五時、仲間の所に帰った。

朝出なら、病人が出て、怪我人が出て、どうすることも出来ず、仕事仕事のみ。毒草で脳がおかされても、日本に帰りたいことだけの神経はすぐひらめく。抑留者全員がどうしてこんな所に連れてこられたのか、考えれば考えるほどなまげない、くやしい。ただただ一日も早く日本に帰してくれることを祈る気持ちの毎日だった。

妻子五人を失った抑留残酷記

新潟県 関川 信二

戦争末期の八月十日、前日あやしい飛行機が我が社鶴岡炭鉱の上空に飛来した翌日、関東軍司令部から非常召集令状がきた。「会社の在郷軍人会長である君は、会社の在郷軍人全員をいんそつし、牡丹江司令部へ行け」との社長代行の言葉。在郷軍人以外の社員と家族は代行がいんそつして新京に行く。家族のことは心配するなどの伝言で、妻と小学校一年生の長女を頭に四人の子供達

に、そのむねを話し、八月十一日早朝、在郷軍人百人をいんそつして牡丹江へと急行した。

某大佐の指揮下にへんにゆうされ「鶴岡隊」と命名され、他からの在郷軍人も加わり、総員二百人、当時予備役陸軍主計中尉の私と、軍医中尉の二人が将校、私は隊長として指揮をとることとなり、昭和十二年北支事変召集以来二度目の軍人生活に入った。

司令兵たん部には兵器類、被服類はかいむ。兵舎は猫の子一匹見当たらない。仕方がないので応召の服装そのままに木銃で守備をかためることにした。

八月十五日夕刻、軍司令部命令で、牡丹江撤去、十八日までにチャムスに集結がくだった。チャムスに着いたら、命令受領のため、将校を司令部に派遣せよとのこと、相談の結果、軍医中尉をはけんし「降服命令」が伝達された。

八月十九日早朝、軍司令部命令で武装放棄した。

数日後、牡丹江の兵舎に収容されて、外出禁止。九月一日、全員集合「海の見えるところへ行く、初めは徒歩、汽車が来たら乗せてやる」との命令。「海の見えると